日本学研究论丛

第三辑

2000年号

张玲老师荣退纪念特集

北京外国语大学日语系 编

第三辑编委：陶振孝
应　杰
林为龙
于日平

外语教学与研究出版社

日本学研究论丛

第　三　辑

2000年号

张玲老师荣退纪念特集

北京外国语大学日语系 编

第三辑编委　　陶振孝
应　杰
林为龙

外语教学与研究出版社

(京)新登字 155 号

图书在版编目(CIP)数据

日本学研究论丛 第三辑/北京外国语大学日语系编. -北京:外语教学与研究出版社, 2002
ISBN 7-5600-2551-X

Ⅰ.日… Ⅱ.北… Ⅲ.日本-研究-文集-日文 Ⅳ.K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2002)第 031428 号

日本学研究论丛 第三辑
北京外国语大学日语系 编

* * *

责任编辑: 徐 滢
出版发行: 外语教学与研究出版社
社　　址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)
网　　址: http://www.fltrp.com.cn
印　　刷: 北京市鑫鑫印刷厂印刷
开　　本: 850×1168 1/32
印　　张: 11.875
版　　次: 2002 年 8 月第 1 版 2002 年 8 月第 1 次印刷
书　　号: ISBN 7-5600-2551-X/H·1324
定　　价: 16.90 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换
制售盗版必究 举报查实奖励 (010)68917826
版权保护办公室举报电话: (010)68917519

张玲　女　1940 年 9 月 21 日出生
1965 年参加工作。

1962. 9—1965. 4　入外交学院学习日语
1965. 4—至今　　在北京外国语大学日语系工作

(工作期间曾赴日本学习和在我驻日使馆工作)

1981 年 11 月聘为讲师

1987 年 11 月聘为副教授

工作期间撰写日本语言方面论文数篇，曾担任语言研究室主任、系主要领导等职。

致张玲老师

11 月份张玲老师荣退了。

日语系的老师们突然感到时间的可怕。记得我们入学时，张玲老师还是风华正茂，青春向上。那时候，张玲老师还是日语教研室里的年轻教师。张玲老师爱接近学生，学生也总是愿同年轻的张玲老师接近。愿意向张老师请教日语的难题，跟张老师谈谈思想。学生中有点不愉快的事也要向张老师说说，甚至学生心中的小秘密也愿意向张老师透露。

那时候，张玲老师住在具有当年特色的筒子楼里。那既是卧室、书房，又是餐厅、客厅的寓所常常有学生拜访。赶得巧还可以吃上几块蒸红薯、糖果等等。同学们还经常抱一抱张老师的千金。岁月流逝，张老师荣退了，张老师的学生也老了。

张老师上课认真，要求严格，学生们上张老师的课也格外自律，不敢有丝毫马虎。张老师是热心肠，系里的老老师常常得到她的帮助，逢年过节到老教师家看看，嘘寒问暖，包上一盘热饺子送上，老教师很感动。张老师热心社会工作，她曾主持过日语系的全面工作，是政治核心里的班长，为此，让她忙得日夜不宁。

作为一名人民老师，教了一辈子书，退休了，本应安排一次隆重的仪式，或者安排一次荣退演讲，或者安排一次谢师会，这些日语系都没有安排，系里同事总感到过意不去。不安排这些活动也有另一缘由，因为大家并没有感到张玲老师退了，因为她永远是日语系的教师。虽然她不来上课了，但大家还是盼望张玲老师常回家看看。

日语系出版这本研究文集，一是展示近年来的科研成果，二是纪念张玲老师荣退。日语系全体师生感谢张玲老师多年来的辛勤劳动，同时祝愿张玲老师荣退后，身体健康，生活愉快。

汪玉林

2000 年 11 月吉日

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

编 者 前 言

我们北京外国语大学日语系先后于 1994 年、1998 年编辑出版了我系论文集《日本学研究论从》第一辑、第二辑，为了庆祝中日和平友好条约签订 20 周年，于 1998 年底，我们又筹划了《日本学研究论从》第三辑，在稿件基本选定，准备出版之际，今年的五一节迎来了以奥田靖雄为首的“日本语言研究会”的诸位先生和朋友，与我们共同召开了研讨会，日本各位先生发表了最新研究成果，给我们留下了深刻印象，使我们获益匪浅。我们很高兴把日本各位先生的论文收入《日本学研究论从》第三辑中一并付梓。

这本论文集的内容涉及到日本语言、日本文学、日本社会文化等方面，论文共 22 篇。有关日本语言的文章收录了 13 篇，其中日语语法 3 篇，日语词汇 2 篇，翻译 2 篇，教学法 2 篇；有关日本文学方面的文章 6 篇，涵盖了上古的诗歌、中世的日记、明治的自然主义文学、大正文坛的重镇芥川龙之介、横光利一以及昭和初期的代表作家太宰治。虽然文章的深度各有不同，但是反映了我系在日本文学方面的实际情况；日本社会文化的论文共 3 篇，1 篇是关于民俗文化中的“七夕人形”的，2 篇是谈经济问题的。

不难看出，所收录的论文大多都是我们日语系的广大教师撰稿的，此外还收录了日本语言研究会奥田靖雄、佐藤里美、高濑匡雄三位先生的论文以及校友续三义、彭广陆、陈连冬和薛豹等同志的文章。各位的文章精彩纷呈，为本论文集增色添彩。我们相信这本论文集对于推进我系的科研活动，加强对外交流将会起到积极的作用。

总之，这本论文范围宽广，内容丰富多彩，体现了我系近几年的科研情况，但是我们也深深地感到我们的科研有待于向更深的方向开掘。我们愿在国内外专家的鞭策下，在同行的鼓励下，努力工作。同时我们寄希望于我系新一代年轻教师，我们希望在下一辑里，能看到他们的高水准的研究成果。

1999 年 10 月

北京外国语大学日语系《日本学研究论从》

第三辑编委　　陶振孝

应　杰

林为龙

于日平

目　　录

1. 現実・可能・必然——すればいい、するといい、したらいい……奥田靖雄　(1)

2. モダリティーの表現手段としての述語の形式をめぐって……佐藤里美　(27)

3. 話し手と語り手……高瀬匡雄　(47)

4. ト格の名詞を支配する動詞について——連語論点的視点から……彭广陆　(70)

5. 关于“そうだ”的否定形式……续三义　(106)

6. 「ながら」の接続表現及びその使い方について……张慧芬　(117)

7. 中日限定表現の比較の一試み……陈连冬　(130)

8. 語彙教育と類義語……鲍显阳　(147)

9. 日中対立構造語の研究——日中同形語を中心として……薛　豹　(161)

10. 清末来华传教士与我国植物术语的翻译……朱京伟　(188)

11. 试析误译……陶振孝　(207)

12. 敬語指導をめぐって……王　萍　(219)

13. 教授日语被动句时应注意的几个问题……徐　琼　(243)

14. 日本上古诗歌文学史话……何蔚泓（255）

15. 略论平安时期的女性日记文学……赵小柏（269）

16. 日本近代の幕開けと自然主義文学……林为龙（280）

17. 芥川龍之介と映画——「映画」、「夢」、そして
シナリオという方法……秦　刚（296）

18. 矛盾における日本人——横光利一の『上海』
……熊文莉（306）

19. 生に対する不安、死への憧憬
——『魚服記』から見る太宰治作品の二
要素……应　杰（321）

20. 人形における祓除と神送りの結合
——雛人形と七夕人形の再検討……王　彦（330）

21. 中日关系变化的原因及其未来展望……邵建国（345）

22. 経済発展と就業構造——中国、
マレーシア、日本の比較研究……丁红卫（352）

現実 ・ 可能 ・ 必然
——すればいい、するといい、したらいい——

奥田　靖雄

（1）「すればいい」を述語にする文は、字びきなどでは、願望あるいは期待をいいあらわす《まちのぞみ文》であると、みなされている。たとえば、研究社の『和英』は、「すればいい」にI wish (hope)という訳をつけている。また、たぶん『和英』からの借用だろうが、コンラードノ『和露』でも、「かれがはやくなおればいい」という用例をあげて、Если бы он поскорей поправился! という訳をあたえている。これらの辞書では、「すればいい」を述語にする文は、期待あるいは願望をいいあらわすところの optative であると、みなされているのである。最近の調査では、高梨信乃がこのかたちに願望の意味のあることをみとめている。つぎにあげる例にみられるように、じっさい、そのようによみとることのできる、つかい方もある。

「そうですよ。むかしから房子をきらって、修一ばかり可愛がってらしたじゃありませんか。あなたはそういう方ですよ。今だって、修一がそとに女をこしらえているのに、なんともおっしゃれないでしょう。みょうに菊子をいたわって、かえって残酷よ。あの子はお父さまにわるいと思って、やきもちもやけ

やしない。ゆううつですよ。台風にふきとんでしまえばいい。」（山の音）

矢木に所得税があるのを波子もしっていた。しかし、自宅からはおさめないで、学校の寮かなにかを納税地にしているらしかった。その方が便利なのだろうと、波子は気にとめなかったが、それもまた、矢木の所得を波子にかくす、用心のためかしらと、今はうたがわれる。

波子はぞっとしてきて、

「私のものが、なにもかも、一切なくなればいいのよ。なにもおしくはないわ。」（舞姫）

「ノリは男がしねばいいのね。」

「ああ、そうだよ。男はおれひとりのこしてみんなしんでしまえばいい。」

「だって、女護ケ島みたいななかでひとりになって、なにがうれしいのよ。」

「いいよ、女どもをこきつかって、ハレムの王様だ。理想だね。」（輪環）

わが神よ。自分はどうしたらいいのであろう。いっそ今、とっさのあいだに汽車の発する時間がきてくれればいい。自分はとてもじっとして、この一夜のあけるのをまつことはできぬ。うごくにしくはない。身体はどこかへなりうごかしたらば、いく分か気のまぎれ、心のかわる機会もあろう。自分は往来をとおりすぎる自動車をよびとめた。（ふらんす物語）

美那子はだまって魚津とならんであるいていると、ふたたびおちつかない不安な気もちが自分の心をしめてくるのを感じた。美那子はそんな自分の気もちをうかがいみるようにしたが、そのおちつかない気もちがどこからやってくるのか、わからなっかた。

美那子は、はやく魚津がどこかしゃれた、あかるいレストラ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ンへでも自分をつれていってくれればいい、と思った。そこで魚津とむかいあってフォークとナイフをうごかす時間のくるのをのぞんだ。(氷壁)

「いっそ、世界中の人間が一日に二時間だけはたらくようになればいい、と思うわ。…」(放浪記)

しかし、「すればいい」を述語にする文を、どの程度にoptative であるか、判断するのはむずかしい。「すればいい」にさしだされる動作Pが実現すれば／問題は片づく、あるいはおこらない／というふうによみとれば、文の意味はじゅうぶんにくみとることができる。動作Pははなし手の意志にしたがうことのないものであれば、その実現は期待にすぎない、ということにもなるのだが、そのような意味は場面との関係のなかで生じてくるものであって、文の言語的な意味としてはとりあげる必要はないとも、みることができる。じっさい、期待感をともなわないばあいもある。

さらに、『和英』は「あんな犬はころしてしまえばいい」という用例をあげて、それに That dog ought to be killed という訳をあたえている。ここでの ought は／当然、正当、適切／を表現していて、／すべきである／という訳をあたえることができるたろう。おなじ用例を『和露』もつかっていて、эту собаку следовало бы уничтожить という訳をあたえている。つぎにあげる例がしめしているように、／すべきである／というような意味のつかい方も、「すればいい」にあるようにみえる。

「あんたはね、まだ子どもなのよ。」

と、加津子夫人はたしなめる口調になった。

「小説なんかかくのはまだはやいわ。いまはまだまじめに学校の勉強をしていればいいの。」(洒落た関係)

「ぼくはジンと頭にこたえるような甘味はいやだな。」

「男の方がそんなこというの、みっともないわ。だまって、たくさん召しあがっていればいいよ。…」（若い人）

「べつにつれて行きたいわけではない。」

「つれて行きたくなかったら、ぴしゃりとおことわりになればいい。…」（憂愁平野）

「おれは母を遺棄することはない。しかし、母の存在によっておれの生活をゆがめることは承知できない。母はひとりでしずかに生きていればいいのだ。」（青春の蹉跌）

しかし、「すべきだ」におきかえて、おかしくないような「すればいい」の使用例は、そんなにたくさんあるわけではない。「すればいい」の意味から／すべきだ／を排除するために、「すべきだ」を述語にする文をしらべてみよう。

（２）「すべきだ」を述語にする文は、／動作Ｐの実行は当然である／という、はなし手の評価的な判断をつたえている。かつ／実行が必要である／ということであれば、この文は必要表現のひとつのタイプである、ということになる。したがって、はなし手の、「する、しない」の選択のうえに文は成立している。はなし手は、「当然なされなければならない動作がなされないでいる」という現実をまえにして、当然かつ必要であるところの動作の実行を「すべきだ」のなかにさしだしているのである。その選択は、法的な、倫理的な、論理的な、生活的な行動規範の観点にもとづくところの義務感、あるいは内的な欲求にしたがって、おこなわれる。

「でも、せっかくきたんですから、おあいになればいいのに。えらい先生なら、そんなこととがめないでしょう。」

「もちろん、とがめない。とがめるような先生じゃない。し

かし、こっちの気もちがだめだ。やはり尊敬する人物にはきちんとした恰好であうべきだ。」（憂愁平野）

「ザイルがきれることはないと、いわれると、君のたちばはへんなことになってくると思うんだ。ザイルはきれないということは、とりもなおさず君がザイルをきったということじゃないのか。」

「そういうことになるのだろう。」

「しっかりしろよ。君はこんど東京にかえったら、はっきりと、いかにしてザイルがきれたかを、詳細に発表すべきだよ。」

「もちろん発表する。」（氷壁）

「そういったって、ザイルがきれたのをきれたといわれたんだから、し方がないじゃないか。だいたい、ぼくは佐倉製鋼という会社があまりすきでない。こんどのことばかりでなく、すこしでしゃばるよ。なんだいあの佐倉という人物は。」

常盤はふといバスでいった。

「まあ、君、佐倉氏の問題はこの際きりはなすべきだよ。」（氷壁）

「僕もながすぎる気がしているんですが、なんなら削除してもいいんです。」

「いや、これは削ったりなぞするより、このまま自然描写のうつくしいところをよませるべきですね。」（杏っ子）

「それはいいことをしたね。なかんずく、あやまったのはいいね、あやまるべきだよ。」（杏っ子）

「…現在の朝廷はよわごしになっている。その朝廷を擁護して、武士に対抗するのが、自分らのつとめではないか。それをわすれて、座主みずからが降伏しようとするのはゆるせない。そんな座主は、よろしくお山からおいだすべきだ。」（親鸞）

「すべきだ」が過去のかたちをとっているばあいでも、原則

的には、その意味構造はかわらない。しかし、そのばあいでは、そのようにおこなわれなかった過去の現実にたいして、そのようにおこなうのが正当であり、必要であると、はなし手は現在の時点からとりかえしのつかない過去を反省し、批評する。「しなければならない」が過去のかたちを採用するとすれば、その過去における、実行を必要とする動作をさしだしている。

「いやにながかったんだな。」

「夕飯の相談からねる部屋の相談までうけたんだ。平生は親父さんがいるんだが、今日一泊で静岡へいったんだそうだ。やっかいになるんだから、何か土産をもってくるべきだったな。」（夏草冬濤）

「わたしにとって、その人がこの地球上でただ一人の人だったら、し方がないでしょう。わたしはその人にもう二、三年はやくあって、本当に結婚すべきだったの。でも、あった時はすこしおそすぎたの。…」（春の嵐）

「…君は、事件の意味が私をふるえあがらせた，雪よりもつめたい事件の意味が、と名文をふるっているが、それこそ雪よりもつめたく事件を記述すべきだった。」

「だんだん点がわるくなりますね。しかし、明日のるのをよんでください。雪よりもつめたく記述してありますよ。」（氷壁）

「立場がちがう。」

「それがまずかった。あなたはこの話が実現されるまえに、一応仏応寺の檀徒にはかるべきだった。たとえ、衆議が一決されなくとも、感情論でもたつこうと、筋をとおしてもらいたかった。」（菩提樹）

「…ただ八代教之助氏の場合は、娘以上に魅力のあるものがあるからいけませんな。わかい奥さんとでなく、原子力と結婚

すべきだったんです。…」（氷壁）

「…否、身をもって戦争を阻止すべきであったし、あやまって戦争をはじめたならば、戦勝の見こみないとだれが目にもあきらかになった瞬間に降伏すべきであった。」（ある昭和史）

「すべきだ」を述語にする文では、実行されていない現在の、あるいは過去の動作にたいして、その動作を実行することが必要であるとの、はなし手の評価的な判断がさしだされている。とすれば、実行しない現在の事実、あるいは実行しなかった過去の事実の記述が、なんらかのかたちで文脈のなかに記述されていなければなたない。それがこの「すべきだ」の前提としてはたらいている。

（3）しかし、「すればいい」を述語にする文は、そのような意味構造のなかに配置されているわけではない。「すればいい」が使用される場面では、まず解決しなければならない課題が生じていて、その課題を解決するために適切な動作がもとめられている。このようなテキストの意味構造のなかで、はなし手は課題解決のための適切な動作を評価的な判断のなかにとらえて、「すればいい」のなかにさしだすのである。つぎにあげる例にみられるように。

「お見送りしてまいります。」

と、平四郎にむかっていった。

「自転車がないじゃないか。」

「うしろにのっていただけばいいわ。失礼ですけど。」（杏っ子）

「芸者かね。なにも僕が絶対的に拒絶したわけじゃあないのです。学生諸君もこられる席であってみれば、そんなものはよばない方が穏当だろうといったのですよ。」

塩田は最初から譲歩しかかっている。

「そんなら、君の、その不穏当だという感じをすこし辛抱してもらえばいいのだ。」と、偽善ぎらいの男が露骨にでた。（青年）

「…いくら愛情が純粋だって、そんな不便な生活はつづかないね。やはり身のまわりをやってくれる女がほしいよ。たとい、ふたりの愛情が少々不純であっても、その方がいいんだ。」

「身のまわりのことは、家政婦ひとりやとえばいいのよ。…」（洒落た関係）

「…だから、おたがいに支配されたり、奉仕したり、そういうことは一切ぬきにしたいの。奉仕は他人にしてもらえばいいわ。その分はおかねをはらうの。家政婦、料理人、女中さん、運転手、看護婦、みんなおかねでやとえるわ。その分は自分ではたらけばいいのよ。」（洒落た関係）

彼女はうきうきしていた。さきのことはわからない。しかし、さしあたっては、あの人をつかまえるのが一番の早道でもあるし、確実な道でもあった。風見院長はおこるかもしれない。おこられたら、手に手をとって、でていけばいいのだ。（洒落た関係）

彼はしだいによっては径子をつれて、影山の家をでてもよい、と思っていた。結婚した当時の影山はまだ三十まえの貧乏サラリーマンであったから、この家の現在の財産はふたりできずいたものだ。自分はもらっていく権利がある。すくなくとも現金で一千万円はとってやる。それがいやなら、影山がでていけばいいのだ。（洒落た関係）

「いいわよ。だって、あなたは結婚したいんでしょう。」

「結婚してもいいかね。」

「わたしは今まであなたの生活に口をだしたことは一度もあ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com